

ナガナガをもとの体にちぢめさせて、ドブンといずみの中へ入りました。そして、いきなり、プープーと体をふくらませて、とうとういずみいっぱいにくらんでしまいました。ですから、水はどんどんあふれ出して、大水のように、あたりいっぱいひろがりました王子とあとの二人は、その水の中をさがしまわりました。しかし魚はどこへいったものか、いくらさがしてもかげも見えません。火の目小ぞうはじれったがって「おいおい、だめだよ、ブクブク。こんどはおれの番だ。」と言いました。ブクブクはしかたなしに、いそいで体をちぢめました。それといっしょに、水は一どにもとのいずみへかえりました。火の目小ぞうは、水がすっかりもとのところへ入ってしまうと、「よし、きた。」と言いながら、大きく目をむいて、じいっと水の上をにらみつけました。すると二つの目からは、例のように長いほのおがシュウシュウとび出しました火の目小ぞうは、息をもつかないで、いつまでもジーッとにらみ続けに、にらんでいました。ですからしまいには、いずみいっぱいの水が、そのほのおでグラグラとわきたって、ちょうど大がまのお湯がふきこぼれ